PROGRAM NOTE

HCJB開局８０周年記念式典

HCJB開局８０周年記念式典が、誕生の地である南米エクアドルの首都キトのHCJB放送局で開かれました。

会場となったHCJBの大ホールは、８０周年のお祝いにかけつけた各界からの来賓や放送局の関係者などで埋め尽くされました。

エクアドルで最初のラジオ放送局として開局したHCJBは、この８０年間、国の文化・教育・道徳の面で重要な役割を果たしてきました。来賓として出席したレニン・モレノ副大統領は挨拶のなかで、HCJBが初期に開発した電池式の小型ラジオ・ラジオ時代をふりかえって「私はまだ子供だった頃は、ラジオといえば、HCJBばかりきいていました。なにしろ、その放送以外はどこも入ってこないのですから。選びようがありませんでした。」とみんなを笑わせました。

音楽好きのカルロス財務大臣は 、「HCJBだけがクラシック音楽を毎日１時間解説付きできかせてくれました。いつも音楽的教養を高める番組や、聖書の番組で、人生の諸問題に対決する道を人々に示してくれた。」とHCJB番組が楽しいだけではなく、実際に役立つ番組が多く組まれていたことに評価を示しました。

ガロ・チリボガ司法長官は、「HCJBは、エクアドルの情報メディアの開拓者として歴史的存在であり、とくに国際短波放送をとおして、 エクアドルの自然、産業、歴史、文化などの魅力的な情報を世界の国々に　発信してくれ、国の観光事業もいちじるしく発展させた功績は大きい」とラジオの威力を感謝しました。

パコ・モンカヨ国会議員は、若い頃に陸軍将校だった頃を思いおこして、「国境最前線の守備の任でエクアドル東部のアマゾン・ジャングルに駐屯していた時は、生い茂る緑の大木に囲まれた陸の孤島のまん中で、唯一、HCJBからの放送だけが、外の世界とのコンタクトだった。いつもHCJBの放送を聞くことで、どんなにか心が慰められ、励まされたかしれない。」としみじみ話していました。

そのあと、司会をしていたHCJBニュースキャスターのエドウィン・チャモロさんが、ボルハ元大領領のエピソードを披露してくれました。「ボルハ元大統領がキト中央大学の学生だった時に、アルバイトとしてHCJBで働いていたことを本人が直接話してくれたことがあります。その頃、朝早く起きて、毎朝局に出勤する前に、通りで新聞を買って目を通し、局に着くと、その新聞をスタジオに持ちこんで、朝いちばんのニュースを放送するのが仕事だったそうです。現在は、私もニュース担当で同じことをしていますが。HCJBは、大統領を助け、大統領に助けられながら続いてきている、珍しい放送局だと私は感じています。」

HCJB開局８０周年記念式典
（２０１１年12月16日）
手前からイシオドーロ・ゲーラ夫妻、カルメン＆ホセ・レイノソ夫妻、ダン・シェッド夫妻
ウェイン・ピーダーソン夫妻。

来賓の挨拶のあと、HCJB側からは、ダン・シェッド　ラテンアメリカ局長が、なによりも、エクアドルが、国として、HCJBに大きく手をひろげ　迎え入れてくれたこと、そして、国の成長とともに８０年という長い歩みをともにできたこと、その特権に深い感謝を述べ、出席しているHCJBスタッフのなかから、長年の功労者にそれぞれに感謝状と記念品を手渡してその労をねぎらいました。

最初は、ひさしぶりに姿をみせた　創設者クラレンス・ジョーンズ博士のお抱え運転手だったエンリケ・ロメロさん。ロメロさんは、HCJBの最古老のひとりで、１９３１年（昭和６年）にHCJBの開局１０年後に運転手としてやとわれたのですが、張りのあるマイクによく通る声が認められて、次第に放送番組にも出演するようになり、スペイン語放送の責任者にまでのぼりつめ、そのあと退職して、今は　地方で牧師として奉仕しています。

エンリッケ・ロメロ

もうひとりは、最年長のイシオドーロ・ゲーラさん。１９６０年台にゲーラさんはHCJBが独自に開発したポータブル・ラジオの組立工場で働いていました。局内の２階にあったこの作業場では、HCJBの番組をきいてもらおうと、安価で簡単な受信機が開発されました。職員が手作りで一台、一台制作したもので、ラジオには、スイッチのつまみが一つ付いているだけ。四角い木箱（25x25x10cm）の上部には手提げ用の把手があり持ち運び自由。乾電池なので、電池がなくなったり、修理のために人々が放送局にきたりすると、その　人たちへのアフターサービスもゲーラさんの担当でした。そのうちにトランジスターが開発され、一般にラジオが普及したため工場は閉鎖になり、ゲーラさんは放送局のスタジオ・オペレーターをしたり、ピフォ送信所で働いたりしましたが、定年退職してからは、HCJB放送局に相談にくる人や、HCJB病院の入院患者のためのカウンセリングをボランティアでひきうけています。

ホセ・レイノソと奥様のカルメン夫妻はHCJBで働きはじめて４１年。レイノソさんはドミニカ共和国生まれですが、育ちはエクアドル。　HCJB放送局で「婦人番組」を担当していたカルメンさんと知りあって結婚しました。ふたりとも、放送番組はもとより、HCJBがラテンアメリカで土着化するための推進役として、また責任ある指導者として大きく貢献しました。現在はアメリカのアトランタ市に住んで、著名なスタンレー・ジョーンズ牧師のラジオ・テレビ放送のスペイン語の声優として活動をつづけています。

最後に、エクアドルで開かれたHCJB８０周年記念式典をしめくくるにあたって、　ウェイン・ピダーソンHCJB会長は、次のような言葉で抱負を語りました。

「８０年前に赤道直下の国エクアドルではじまった放送が、いまも、エクアドルのみならず、世界の各地で積極的に働きがすすめられていることは驚異的なことです。アンデスの山の上ではじまった小さな放送局でしたが、神様は豊かに祝福してくださり、現在では、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、中東、南北アメリカ大陸など地球上にその広がりをみせています。HCJBが関係している放送局だけでもざっと４００局をこえており、今後ますます、HCJBのモットーである放送、地域医療、教育の３本柱を掲げながらグローバルにその使命達成を推進させていきたいと思っています。」

日本語放送担当

尾崎一夫

hcjb global

今月のベリカード

「HCJB Control Room - Quito Ecuador」

放送用の番組テープを２４時間放送する番組自動送出室ですが、テープの取り外しだけは手動です。ある時、夜勤係が寝てしまい自動のI.S.だけが繰り返し"on air"されたので、監視役「フクロウ当番」が誕生しました。

『サタデー・トーク』	
きき手　尾崎一夫	
毎週土曜日放送	
3月　3日	上海帰りの郁子・牧実姉妹　（1）
3月１０日	寿司レストランで復興支援（あれから１年）
3月１７日	上海帰りの郁子・牧実姉妹（2）
3月２４日	HCJBは今・・・（さらばピフォ送信所他）
3月３１日	養蜂家　蓮子哲也さんを訪ねて　（1）

『バイブル・トーク』	
東京淀橋教会　峯野龍弘主管牧師	
毎週日曜日放送	
3月　4日	聖書遊覧バス
3月１１日	寿司レストランで復興支援（あれから１年）
3月１８日	聖書遊覧バス
3月２５日	聖書遊覧バス

放送後の番組は、ホームページ（http//japanese.hcjb.org)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。（mp３形式）

放送時間：日本時間午前7時半～8時　　放送周波数：　15525kHz 19mb）

（米国アリゾナ制作／オーストラリア送信）

HCJB日本語放送

新住所：HCJB（日本語放送）5701 N Indian Trail TUCSON AZ 85750 USA